



躍進する医療機器業界

世界の医療機器市場の規模は2019年に4,044億ドルに達し、年平均3.9%（2014年～2019年）の成長率で拡大しています。一方、韓国の医療機器市場を見ると、その規模は2019年に65億ドル（世界10位）に達し、2015年から2019年で年平均10.3%の成長率を示しています。

韓国特許庁によれば、ここ10年間（2011年～2020年）の医療機器分野の特許出願は93,621件あり、年平均8.0%の増加率を示したことが分かりました。特許出願全体における増加率の年平均が2.2%であるのに対して、3.6倍を超える爆発的な成長です。コロナ禍で経済活動が制限されるなか、特許出願件数は意外に好調なようです。

出願件数を分野別に見ると、手術用メス、カテーテルなど伝統的な医療機器が含まれる手術治療機器分野が13,534件と最も多く、次に注射針や採血器具などの医療用品（12,952件）、脈拍測定装置などの生体計測（11,983

件）関連が多く出願されています。また、同期間で年平均増加率が最も高かった分野は、医療情報機器分野でした。この分野には患者記録管理から健康管理アプリケーション、遠隔診療プラットフォームなど医療情報を扱う品目が含まれますが、これはスマートヘルスケア及びビッグデータ、人工知能などの4次産業技術が結合された医療機器に対する技術開発のトレンドが反映されたものと考えられます。2021年度にICT（情報通信技術）分野の研究開発に5千億円以上の予算を投入すると明らかにした韓国政府の後押しもあり、今後もICT能力を活用した医療機器が期待されます。

2020年に着目すると、コロナウイルスの影響により、診療補助装置（140.0%）、麻酔呼吸機器（58.8%）、医療情報機器（42.7%）分野の増加率が目立ちます。これらの分野に属する消毒殺菌器、呼吸補助器、非対面遠隔診療などの出願は、国内の感染予防対策の原動





力となりました。

出願人の内訳を見ると、ここ10年間に於いて内国人が78.6%、外国人が21.4%となっており、内国人による出願の割合は2011年から増え続け、やはり医療機器分野における国内出願人の関心の高さがうかがえます。詳細には、中小企業が26%、個人24%、外国法人20%、大学16%、大企業5%の順に多く出願しています。

10年間で最も多く出願を行ったのは、2,316件のサムスン電子であり、映像診断、生体計測、リハビリ補助、医療情報分野で1位を占めました。そして、中堅企業であるソウルバイオシス、ボディフレンド、オステムインプラントは、それぞれ診療補助装置、治療補助、歯科機器分野において、また、中小企業であるメックアイシーエス、イントロメディックは、それぞれ麻酔呼吸、医療用鏡分野で1位を占めました。

韓国内における医療機器の生産品目のランキングを見ると、1位は歯科用インプラント（1兆3,621億ウォン）であり、次に汎用超音波映像診断装置（4,706億ウォン）、組織修復用生体材料（2,435億ウォン）となっています。

輸出品目の1位は、3年連続で汎用超音波映像診断装置（482百万ドル）であり、次に歯科用インプラント固定体（225百万ドル）、

整形用フィラー（219百万ドル）の順になっています。また、輸入面では、老眼や白内障の手術に使用される多焦点人工水晶体の輸入増加率の高さに注目が集まりました。韓国も日本同様、急速に高齢化が進み、QOLに対する国民の関心が高まっているためでしょう。

最後に、韓国特許庁ではホームページを通じて‘新型コロナウイルス特許情報ナビゲーション（https://www.kipo.go.kr/ncov/index_e.html）’を提供しています。治療・診断・防疫に関する主な特許技術の動向や情報が掲載されており、特許文献は韓国だけでなく、海外特許も提供されています。英語でも提供されているので、海外からのアクセスも可能です。世界中で情報を共有しながら、早期のワクチンや治療薬の開発が進むことを願ってやみません。

筆者紹介



柳鍾宇 (ユ ジョンウ)

GIP Korea代表弁理士。ソウル大学電気工学部を卒業。2009年弁理士登録。弁理士になる前は（株）LGディスプレイで設備購買及び技術営業の日本担当を務める。

前職の特許事務所では、最初は（株）サムスンの特許明細書作成／中間処理／外国出願などを行い、後に日本企業の韓国出願を担当。趣味はゴルフ。